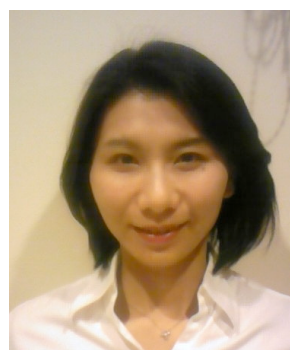


修了生の声

【加野 泉】（平成 21 年度修了、国際言語文化研究科多元文化論講座進学）

入学前、当時一歳の長男を育てながら外資系企業に勤務していた私は、仕事とそれに必要な英語と翻訳技術の向上、そして育児という三つの課題に追われつつ、そのうちのどれにも十分に力を注ぐことができない状態に苦しんでいました。



そんな折、長女を妊娠。二人の子育てをしながらこれまでと同じ生活を続けるのは難しいと悟り、一度仕事を諦めることにしました。しかし、今は諦めても、未来の仕事までは諦めたくない、また翻訳の仕事に携わりたい。そんな思いから、翻訳技術や英語圏の文化について深く学び、力を蓄えておきたいと強く望むようになりました。

こうして飛び込んだ国際言語文化研究科は、私の学習意欲と知的好奇心を存分に生かせる場所でした。高度専門職業人コースの必修科目である英語と翻訳技術に加えて、専攻の科目から翻訳理論や比較文化を選択し、翻訳の実践と研究理論を同時に学ぶことができ、さらに、自らの経験から大きな関心を持っていたジェンダー論を学ぶことで、修士論文を書き進めるための礎を築くことができました。

また、論文執筆にあたっては、主指導の先生をはじめとする複数の先生方から熱心にご指導いただき、そのお陰で最後まで情熱を持って研究に取り組むことができました。

入学式の直前に誕生した長女は、修了式の翌日に二歳になります。

二人の乳幼児を育てながらの大学院生活は、息をつく間もない大変な毎日でしたが、先生方のご理解と、夫と両親の大きな協力を得て、完走することができました。こうして支援してもらっている分、しっかりと力をつけなければならないと自らを奮い立たせ、一心不乱に学問に打ち込み、とても充実した幸せな二年間でした。

がむしゃらに学んだこの二年間で、一生の友と思えるような書物や、これから研究を進めていきたいテーマにも出会えました。このコースで学んだことを土台にして、今後も情熱を持って研究に取り組んでいきたいと思っています。

【山田 千聡】(平成 20 年度修了生、中日新聞社勤務)

学部の大学生活も後半にさしかかる頃、自分の進みたい道が見つからず、まだ学び足りないと感じていた私は、周囲が就職活動にいそむ姿を横目に、進学する決意を固めました。しかし、極めたい分野をなかなか絞ることができず悩んでいた最中、英語のスキルを磨きつつ、大学院レベルの講義を受講できる名古屋大学・国際言語文化研科の高専人コースの存在を知り、迷わず受験を決めました。

翻訳・通訳技術演習やネイティブ・スピーカーによる英語表現演習では、欧米諸国の文化や歴史を学び、知識を蓄えることができました。また、高専人コースの特長として他講座の授業を幅広く受講できることがあり、メディア論や英語圏以外の文化論といった様々な分野の学問に触れることができ、関心と視野を広げることができました。日常で見聞きする国際ニュースや時事問題に対する見方も変わり、多角的に物事を捉えられるようになったと思います。

二年間の大学院生活を振り返ると、刺激的で充実した毎日を送る中で、大切な出会いがいくつもありました。研究科には仕事を続けながら学ぶ方、家事と両立しながら学ぶ主婦の方など、様々なバックグラウンドを持った人たちが集まっています。また、留学生が大勢在籍しているので、日本にいながら外国にいるかのように、異なった文化的背景を持った人々とコミュニケーションを持つことができます。学習意欲が高く、自分の夢を実現させるために努力し続ける仲間たちと切磋琢磨しながら学べたことが、何ものにも代えがたい一番の宝となっています。

友人が続々と内定をもらう中で、一人黙々と大学院入試に向けて勉強していた学部の4年生の時期や、修士2年生になって大卒の子と一緒に就職活動をしている最中は、不安でいっぱいでした。しかし、就職した現在では、そんな苦労もすっかり忘れてしまうほど、二年間で得たものは大きく、学べることがいかに幸せで、楽しいことであったのかを実感する毎日です。大学院卒であっても、就職活動において決して不利にはならないと思います。今では高専人コースで得た知識や英語力を直接活かせる機会はありませんが、今後の人生を豊かにする上で必ず役立つものであると思っています。

【高須由香】（平成 19 年度修了）

大学を卒業してから八年間、公立高校の英語教員として働いていた私は、忙しいながらも充実した毎日にもかかわらず、何か足りないような感覚にとらわれていました。そして昨年、それが何であるのかもよくわからないまま、名古屋大学大学院国際言語文化研究科に飛び込んだのです。大学院生としてのこの一年間は、多くの新鮮な経験を積むことができました。



まず第一に、学問。アメリカやヨーロッパを中心とした文化に関する授業や報告書の執筆は、私に、新たな角度から「英語」という言語を眺める視点を与えてくれました。哲学に関する授業では、その難解さゆえに現実から引き離され、自分の身の回りの世界を客観的に見る機会を持つことができました。

次に、実践的な英語力。実際に翻訳や通訳の現場で活躍された先生の授業やインターネット上の教材を利用した英語学習は、私の英語学習に、大きな刺激を与えてくれました。レベルの高い英文を毎回数十ページ読みこなしていかなければいけない予習は、辛いと感じたこともありましたが、確実に私の英語力を高めてくれました。

そして何より、恵まれた人間関係。自分の教え子と同年代の同級生と一緒に学ぶことは、少し不安で、照れくさかったけれども、本当に楽しかったです。指導は厳しい先生方も、普段はとても気さくで温かく、先生も交えたおしゃべりからは、学問以外のことも多く学ぶことができました。

修了して数ヶ月が経った今も、入学する前の自分に何が足りなかったのか、そして、この一年間で何を達成することができたのか、具体的な言葉で表現することはできませんが、大学院生活は、私のこれからの毎日に、大きな糧を与えてくれたように思います。本当にありがとうございました。

【佐藤綾子】（平成 18 年度修了）

高専人コースへ進学することを志したのは、学部時代に勉強した英語の語学力を、より実践的な技術として活用できるものにしたいという思いがあったからです。コースに入学

後、私はその思いにそって、翻訳技術の習得を目的とする授業をはじめとして、ネイティブの教授による文化論の授業など、幅広く英語やその背景にある欧米の文化を学ぶ授業を履修しました。

英文学の古典小説の翻訳の課題のために辞書を片手に四苦八苦しただかと思えば、翌日にはネイティブの教授の授業でクラスメイトと英語で議論し、また別の日にはジェンダー論や文化論の講義を聴き入るといった学生生活でした。



私が学んだように、このコースの特色として、英語の翻訳や通訳技術など、コースで必修となっている実践的な英語の技術を学ぶだけではなく、他講座で開講されている授業を履修できるということがあります。実際に社会に出て英語を用いて仕事をする上では、英語力に加え、英語が用いられる文化に対する知識が必ず必要になります。実践的な技術を学ぶ授業だけでなく、これらの文化論的な授業を履修できたことは、私にとって非常に有益であったと思います。

知識に加えて、人との出会いもこのコースに所属するあいだに私が得た大きな収穫の一つでした。私は学部を卒業してすぐに進学しましたが、同期は社会人経験を経て大学院に進んだ方たちでした。すでに十分すぎるほどの能力を持ちながらも、さらに意欲的に学ぼうとする彼女たちの姿勢に、私は大いに刺激を受けました。

大学院においては、彼女たちの他にも、研究や学ぶことに熱心な老若男女、国籍も雑多な様々な人々との出会いがたくさんありました。

このコースおよび研究科に所属した二年間に学んだこと、そして出会った人々は、私にとって大きな糧となっています。

【阿藤文子】（平成16年度修了、国際言語文化研究科ヨーロッパ言語文化講座進学）

自分自身の高校英語教師の経験や、夫の転勤による欧米滞在体験をもっと生かしたい、そのためにも改めて英語力を伸ばすとともに、国際多元文化等を体系的に勉強したいと思っていました。そんな折、本研究科の高度専門職業人コースを知り、これこそ私の求めていたものという思いがしました。幸いにも入学することができ、1年次には通訳技術演習、翻訳技術演習、母語話者による英語表現演習など、コース独自の授業を通して実践的な英語力をつける機会を得ました。と同時に、いくつもの国際多元文化専攻の専門授業などを

受講しましたが、どの授業も面白く、新たな視点を与えられることも多く、学問の奥深さを感じました。確かに、課題がハードで量も多く、発表やレポートもあり、やりこなすのは大変です。でも、「学ぶことの楽しさ」が本当に分かってきた気がします。この年になってもこういう機会に恵まれたことに感謝の気持ちで一杯です。今日も若い人たちの輪に入って話に花を咲かせ、学生生活を満喫しています。